

日本で暮らす私たちにとって戦争は遠い国の出来事と思うでしょう。しかし、世界のどこかで無辜の市民が命を落とし、経済的なことも含め危機に瀕している。その存在を知れば知るほど、どうしたら彼らの苦しみを軽減することができるのか、何か解決策はないだろうかと考えます。

紛争の現場で何が起きているのか伝えることで、その国の状況が、世界が少しでも良くなればいい、そう思っています。伝え、報道することで社会を変えることができる、私はそれを信じています。

「日本にかかわること」がニュース選択の重要なポイントのひとつであることは否定しません。しかし、それだけではない。例えば世界の安全は日本の安全につながります。人道的な見地からも、目をそらしてはいけない大切なことがたくさんあるはず。それを「仕方がないこと」「直接関係がないこと」と排除してしまうのでは、ジャーナリズムの役目を果たしているとはいえません。そうした広がりのない視点と態度は、形を変えながら私たち自身にかえってきます。内外問わず、目が届きにくい、忘れられがちな問題を掘り起こしていくことも、メディアの責務としてあります。

感想の中で、視聴率重視のテレビ業界への不信感がありました。報道の仕事は数字でははかれない部分がたくさんあります。視聴率にかかわらず、やっておかなければならないことをやる。そのためには、今のメディアの中でどう表現すれば、放送に至ることができるのか、あるいは、企画を通すことができるのか、取材者、作り手としての力も磨いていかなければなりません。批判だけでなく、変革させていくことが必要だと思っています。組織記者とフリーランスを対立させてとらえるのではなく、それぞれの良い点、悪い点を見定め、改善させることが、より良いジャーナリズム、メディアの成長につながるでしょう。

たくさんの質問をいただきました。一部ですがお返事いたします。

- ① 報道で戦争は止められるのか？ → そういう願いがあるからこそ続けられる。
- ② ジャーナリストは現地の人々に救いの手を差し伸べることができる存在か？
→ ジャーナリスト、国際支援団体、国連などの共同作業だと思います。私たち一人一人が関心を持つことも大切です。それぞれが情報を共有し、役目を果たすことで、結果的に救いとなるのでは。
- ③ 被害を受けた人を取材するときの気持ちは？ → できるだけ誠意をもって接しようと思いがけています。インパクトがある映像、写真を撮るためだけに相手の感情を逆なでするような取材方法は、関係性を壊すばかりで続きません。
- ④ 悲惨な状況を見て冷静でいられるのはなぜか。戦場での恐怖心は？ → 冷静ではありません。現地の人たちが全力で怒りや悲しみをぶつけてくるのですから、同じ人間として心を大きく揺さぶられます。悔しかったり、悲しかったり、怒りの感情が生まれ、心の中にどんどん積もっていきます。ですから、報道することで、取材したことが多くの人たちの目に触れ、何かを変えるきっかけになれば、忘れることはなくても、ほんの少し肩の荷を下ろすことができます。
現場で感じる恐怖心を忘れないようにしたい。

社会にはさまざまな考え、職業、立場の人たちがいます。メディアの世界に身を置くと、力を持っていると勘違いしてしまうことがあります。高みから物事を見るのではなく、思いやりのある、優しい人になってください。